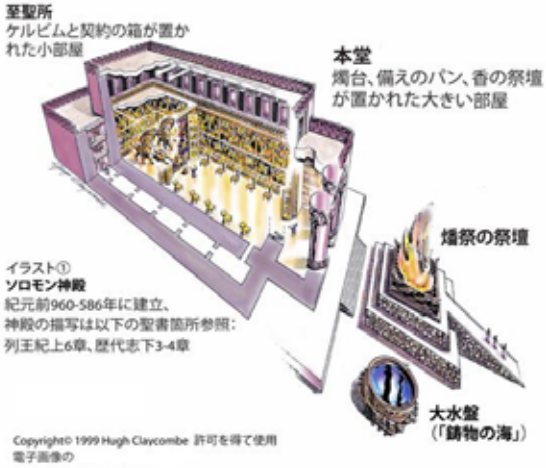
倫理学通信－３

かもめ祭り、ご苦労様でした。今度は中間試験、そして高総体に向けてギアを入れてください。でもこういう心と頭の切り替えはそんなに簡単ではないですよね。人間が機械ではないという証拠です。

さて、前回ある学生が「人を殺すのはなぜ悪いのか」と問うて、その場に居合わせた著名人たちが腰を抜かし、一人もまともな答えができなかったという、世間を騒がせた事件を紹介しました。この事件は新聞などでも結構取り扱われて、ある新聞のコラムに「欧米ではモーセの十戒という規範（何をしては善くないかなどを命じるもの）があるが、我が国ではそれがない」と書いてありました。戦後の教育のなかで道徳をきっちり教えなくなって、その結果乱れた社会になっていることも確かですが、この指摘には少し誤解が含まれています。

モーセの十戒は、次のようなものです。「唯一の神を拝め。神の名をみだりに呼ぶなかれ。安息日を聖とせよ。両親を敬え。殺すな。姦淫するな。盗むな。嘘をつくな。隣人の妻や持ち物をみだりに望むな」です。聖書によれば、この掟は最初の三つ（神に対する義務）がと残りの七つ（人間に対する義務）に分けられて二枚の石版に刻まれたとあります。ついでながら、聖書によれば、この二枚の石版は箱に入れられて、紀元前１０世紀に建てられたソロモンの神殿に収められていたが、紀元前５８６年神殿が破壊されたときにどこかに消えてしまった。この失われた聖櫃を探すのが、インディージョーンズ・シリーズの第一作「失われたアーク」です。



この十戒を読めば、最初の３戒はともかくとして（人間が神様を拝むのは自然なことだと思いますが）、残りの７つの掟は誰にでも当てはまるのではないでしょうか。殺人や盗みや姦淫を「勝手にやりなはれ」と言って罰しない民族も国もないでしょう。キリスト教は、これらの掟は自然法であると言います。つまり、人間なら誰でもわかるということです。ただし、分かることと、それを守ることは別ですが。

でも、善悪の判断、つまり道徳というものは、人間なら生まれつき誰でもわかるということに反対する人もいます。つまり、「何が善くて、何が悪いのかは、生まれつき知っているのではなく、大人に教えてもらって分かる」ので、「善悪の判断は、社会の考え方を押しつけられた結果や。だから、その判断は、場所によって、また時代によって異なる」と主張します。そうしてその主張を証明するために、例を挙げます。「例えばや、江戸時代は親の敵は子供が討つことが美徳とされとったやろ。けれど今は違うやないか。今はもし子供が親の敵を討ったりでもしたら、すぐ逮捕されてしまうで。それは司法にまかせんとあかんようになっとる。だから殺人が悪やというのは、時代によって異なるんや」と。この人たちを実証主義者と呼びます。

しかし、私はこれには賛成できません。それを理解してもらうために、礼儀作法と道徳を比べるのが役に立つと思います。

人間の社会には礼儀作法というものがある。それを知らなければ地人前の大人として社会生活ができなくなるので、私たちは小さいときから大人に教えてもらいます。例えば食事の作法なら、「茶碗は左手でもつ。箸は右手で」とか「食べるときには茶碗や皿を持ち上げて口のそばまで近づける」とか。でも、こういった作法は国によって異なることも少なくありません。以前、学校の生徒のお父さんで北アメリカ出身の人が中学生に講演に来て下さいましたが、そのときに、次のエピソードを話してくれまし

た。彼が日本で暮らすようになってあるときお父さんが国から子供に会いにやって来た。二人で食事のために食堂に入った。お父さんは、人々がうどんをさかんに「ズルズル」と音を立てて食べているのを見て、「けしからん」と怒った。しかし、鼻汁が出てきたので、お父さんはハンカチを取り出し、「チーン」というすごい音を出して鼻をかんだ。すると周りの人が一斉にジロッとにらんだ、というものです。日本では、麺類を食べるとき音を立てるのは礼儀に反することではないが、欧米では静かに食べるのがエチケット。また日本では鼻をかむときには音を立てないようにするが、欧米では音を立ててもかまわない、ということです。礼儀作法はこのように国によって結構違うので、外国旅行をする人は、出かける前に、行く先の国の作法を少しでも勉強していきます。各国の習慣を説明した本もあります。

これに対して、道徳を考えてみて下さい。今度はそんな違いはないでしょう。外国に行く場合、あの国では「殺人や盗みは悪いこととは考えられていない」かどうかを心配する必要はない。だいたい、各国の道徳を説明する本なんかない。それは万国共通だから。ただし、盗みや殺人が多い、治安の悪い国はあるので気をつけないといけないけれど・・。

また、先ほどの「江戸時代は親の敵は子供が討ったが、今は違う」ということですが、江戸時代の人は殺人がよいと考えていたわけではない。むしろ逆で、「人を殺した者は悪いことをしたから、殺されても当然だ」と思っていたからこそ、その殺人者は、自分が迷惑をかけた相手から殺されるのが構わないと考えたのではないでしょうか。ただ、その殺人犯の処罰の仕方が、現代と異なっていたと言えるでしょう。

行いの善悪を判断するのを良心と言います。良心は「善を勧め、悪をとがめ、善いことをしたら満足感を、悪いことをしたら呵責を感じさせる」ものです。しかし、良心という別個の能力があるのではなく、知性という能力があって、それが自分の行いの善悪の判断をするのです。ちょうど知性が「４＋５は１０」と判断するように。ところで、この数学的判断をする能力は、生まれつき備わっていたのか、それとも教わって初めてできたのか。この問題は以前話したプラトンの想起説とアリストテレスの経験論と同じです。プラトンなら「生まれつき持っていた」と答えるでしょうが、アリストテレスは「教えられてわかった」と教えるでしょう。ただし、アリストテレスは、先ほど挙げた実証主義者とは少し異なるのです。

どう異なるかと言うと、アリストテレスは、確かに知識は経験によって（教えられたり学んだりして）初めて獲得できるとしましたが、それを獲得できる能力は生まれつき人間に備わっているとするところです。その能力とは、真理を知る能力です。もし子供が大人から「人のものを盗んでも、なんにも悪いことやあらへんのやで」と教えられたとします。その子は、確かに最初はそう思って平気で盗みを働くでしょうが、いつも「何かおかしい」という違和感をもち、またもし「盗みは本当は悪いことやで」と教えられたら、」「たしかにそうや」と心の中で気がつくでしょう。こういう意味で、アリストテレスも、人間はみな道徳の観念を生まれつき持っていると考えていました。私もそう思います。

人間にそういう判断力が備わっているということは、日常生活の中でも経験することだと思います。ただ良心の判断は、数学的な判断が誤ることがあるように（もしなければいつも１００点のはず）、誤ることがあります。だから、善悪についての教育が必要なのです。